

# 多種多様、淡水魚たちの生態と生活史 淀川水系魚類名鑑

希少野生動植物保存推進員  
横山 達也

## カネヒラ

*Acheilognathus rhombeus*

カネヒラはコイ目コイ科のタナゴの一種で、日本に分布するタナゴのなかで最も大型になる淡水魚です。濃尾平野より西の本州、九州と朝鮮半島に分布していましたが、国内では、本来の生息地以外にも分布を拡大しています。全長は最大で



15cmに達し、体の肩部に青緑色の斑紋があり、口に1対の短いひげがあるのが特徴です。繁殖期になると、オスの体側は淡い青緑色に、背鰭、尻鰭がピン

繁殖期になるとオスは虹色に光り輝く黒バックで撮影するとその美しさがよくわかる



ク色の鮮やかな婚姻色と口元には白色の追星がみられます。また、メスには短い産卵管が現れます。食性は植物食に偏った雑食性で、河川や湖沼の水草が繁茂する流れの緩やかな場所に生息しています。繁殖期は秋の9～11月で、淡水産の二枚貝のイシガイやカタハガイ、タテボシガイ等に卵を産みつけます。産卵後、数日で孵化しますが、仔魚は二枚貝内で越冬し、翌年の春に貝から浮出し、急速に成長してその年の秋には成熟します。食用として利用することはほとんどありませんが、繁殖期のオスには美しい婚姻色がみられ、また国内産のタナゴのなかではもっとも大型になることから、観賞用として飼育されます。特にオスの大型個体は、通常のオス個体より、背鰭、尻鰭がより伸長するため、特に人気が高く、一見の価値があります。

under the water

the waterside

the sky & land

水辺の

## 虫眼鏡

川に棲む水生生物の魅力的な生態

環境省 環境カウンセラー 川島 大助

### 回遊性のモクズガニ

淀川の淡水域には、モクズガニとサワガニの2種のカニが生息しています。サワガニは生涯を淡水で過ごしますが、今回ご紹介するモクズガニは海と川を行き来する回遊性のカニです。淀川では河口～三川合流付近、なかには三川（宇治川、木津川、桂川）をさらに遡上するものもいます。宇治川では天ヶ瀬ダムの上流、さらには琵琶湖でも稀に確認されているようです。ダムの堤体は遡上阻害となりますが、水際の斜面や道路等からでも遡上します。このように水から出ることによって鳥の餌食になったり、道路では車に踏み潰されてしまう危険もあります。本種は秋から冬に成体が川から海に産卵のため降海します。海で生まれた幼生（ゾエア→メガロバ幼生へ変態）は海域～河口域で浮遊生活し、その後、秋あるいは春～初夏の2季に河川下流に着底して稚ガニ（甲幅2mm程度）に変態し、徐々に河川遡上していきます。3～5年（寿命）で甲幅は7～8cmに成長します。そのころにはハサミにはたくさんの毛



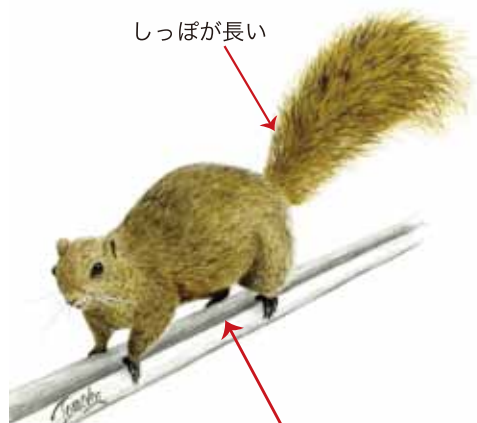
大きなものを蒸して食べると甘みがよくわかる



（藻くず）がつき、この様相が「藻屑蟹」の語源といわれています。食性は魚や貝類、水生昆虫等が主と考えられてきましたが、実際には川底の緑藻（糸状の藻類）やデトリタス（枯死植物由来の有機物碎片）が主な餌となっているようです。本種は食用で有名なシャンハイガニの仲間で、日本でも秋に川を下るモクズガニは漁獲対象となり水産資源になっています。海～川、川～海へと長い距離を回遊してきたモクズガニは、海産のカニにはない独特の甘み、そして濃厚なミソを味わうことができます！

the worst 100

## 侵略的外来生物 淀川ワースト100



ニホンリスは腹が白いが  
台湾リスは背側とよく似た色をしている

AN INVADER

四季折々、  
水辺の生物多様性

芥川緑地資料館 主任学芸員  
高田 みちよ

## 黄色に染まる秋の堤防

秋の淀川の堤防って、黄色一色ですよ。すっかり秋の風物詩になっていますが、ほんの50年前には秋の堤防は茶色だったはず。何が堤防の色を変えたのか、みなさんならご存知でしょう。

秋に一面の花を咲かせるのは「セイタカアワダチソウ」です。北米原産のキク科の多年草で、「背が高く」「種子の綿毛が白く泡立っているように見える」ところから名づけられました。高さは3mにもなり、硬い茎は木のようにもみえます。黄色い花がよく目立つため花粉症の原因植物と思われるがちですが、昆虫に花粉を媒介してもらう「虫媒花」であるため、花粉はねばりがあり風で飛び散ることはほとんどありません。たくさんの花が集まった「集合花序」で、一つ一つの花は花弁があり、明るい黄色で美しいです。そもそもは観賞用として明治時代に導入されたものだそうです。種子はタンポポのように綿毛があり、風でふわふわと飛び散って河川敷などの空き地で生長します。第二次世界大戦後に急激に分布を広げ、今では秋の風景となってしまうています。春はセイヨウカラシナ、秋はセイタカアワダチソウ。今や川のイメージカラーは黄色です。セイアカワダチソウは「要注意外来生物」に指定され、防除の実験も行われています。多年草なので、秋に地上部が枯れる



写真は芥川の堤防に咲いていた  
セイタカアワダチソウ

時、地下の根に栄養を移動させます。この前に刈り取ると、勢力が衰えます。堤防であれば、年1回の刈り取りで背丈低く押さえることができ、年3回以上の刈り取りでは数を減らすことが可能です。とはいえ、広大な面積に広がった植物を防除することは、なかなか難しいようです。

リス科 タイワンリス

*Callosciurus erythraeus taiwanensis*

淀川管内河川レンジャー 石山 郁慧



正式名はクリハラリス。原産地は台湾。ニホンリスよりもひと回り大きく、尻尾が長いのが特徴。主に種子や果実を食べ、冬は樹皮を剥がして樹液をなめる。大阪では万博開催時に台湾との友好記念に、大阪城公園につがい3組を放したものが野生化して定着したと聞いている。ヤマネ・ホンドリリスなどの住処を奪うだけでなく、神奈川県では電線をかじられるなどの被害もあるとのこと。繁殖力が強く、妊娠期間は40日ほどで、1年で成体になる。1回にだいたい2匹を生み、年3回の出産も可能だという。各地の観光地で増え続けているが、国の指導は個体数の減少。鎌倉では年間500匹が駆除されているという。



写真（上）  
写真提供 / 杉浦 豪  
写真（下）  
photo by pakutaso.com

